

[Interview] インタビュー「ごちゃまぜな人」第5回

西岡崇弘さん

障害を感じない小さなコミュニティを作り続けること

障害を持った「社会人」の就労や、養護学校などに通う「生徒」たちなどの声を紹介してきた「GOCHAMAZE times」。なかなか伝えきれていたのが、子供と社会人の間にいる「大学生」たちの現状です。そこで今回は、ソーシャルスクエア西宮が連携している関西学院大学キャンパス自立支援室の西岡崇弘さんに、障害を持った大学生たちの支援の現状について話を伺いました。



現在、支援室に登録をしている学生が80名ほど。そのうち、発達障害などの診断がある学生が35～36名、精神が15～16名、あとは聴覚や視覚の障害がある学生です。特に発達障害の学生は、授業の中での困りごとが多くにわたります。個別のニーズに合わせて環境を調整していくことを業務としています。

大学はいろいろなことを自分で考えなければなりません。中高では、どちらかというと与えられた課題をこなすだけなのでうまくいったたれど、大学に入ると環境が激変し、授業についていけない、同級生ともうまくいかない、ということが起きやすくなります。また、大学ではなんとかやっていたと

いう学生も、社会に出て就職してからしんどくなってしまうこともあります。

やはり大学在学中にサポート体制を築くことが大事だと考えています。一般枠で就活を進めるのか、障がい者枠で進めるのか、支援機関へ行くのかなど就活(進路)の方向性を、特性理解を踏まえて見極めることを目的にしています。特に障がい者枠を選択する場合は、働き始める前に、自分の特性や職場に求める配慮を理解しておくことが大事です。

ただ、大学でできる支援は学内に限られるので、学内に一歩でも入ってくれば様々な相談を受けられるので

いう学生も、社会に出て就職してからしんどくなってしまうこともあります。重篤な学生のケースを見てみると、大学の授業以前に、普段の生活の基盤が構築されていないというケースをよく見ます。大学に行こうという状態になっていないわけです。

そのような時に欠かせないのが生活フォローです。大学の外なので、私たちにできることは限りがあります。ソーシャルスクエアのような地域の事業所と連携して生活フォローをしていくことは重要です。そうすることで大学に来てからの支援もスムーズになります。学生の環境を全体で支えていくことが大事なんです。

学生を見ていると、結局、つまずきが

西岡 崇弘 にしおか・たかひろ

奈良県生駒市出身。臨床心理士の資格取得後、大阪府スクールカウンセラー、高齢者ケアセンター、精神科クリニック等での臨床業務を経て現職に至る。主に精神障害・発達障害を有する学生の修学支援を担当。

いわきから「ごちゃまぜ」 あらゆる障がいのない社会へ

GOCHAMAZE

times

2017
SUMMER
5

theme 一人ひとりの物語に寄り添う



CONTENTS

[Talk Session]

横山万里子さん
(ハンドスタンプアートプロジェクト)

[GOCHAMAZE Report]

アイシングクッキー

[Interview]

西岡 崇弘さん
(関西学院大学キャンパス自立支援室)

and more...



横山万里子

Mariko YOKOYAMA

1980年千葉県市川市生まれ。6歳と5歳の子どもの二児の母。難病を持って生まれ、5歳で亡くなった息子をきっかけに介護士として働きながら、ハンドスタンプアートプロジェクトを2014年に立ち上げ。一緒に子どもたちの未来を笑顔にする仲間を世界中で探しながら、手形で世界一大きなアートを作るプロジェクトに挑戦中。2020年までに10万枚を目指している。

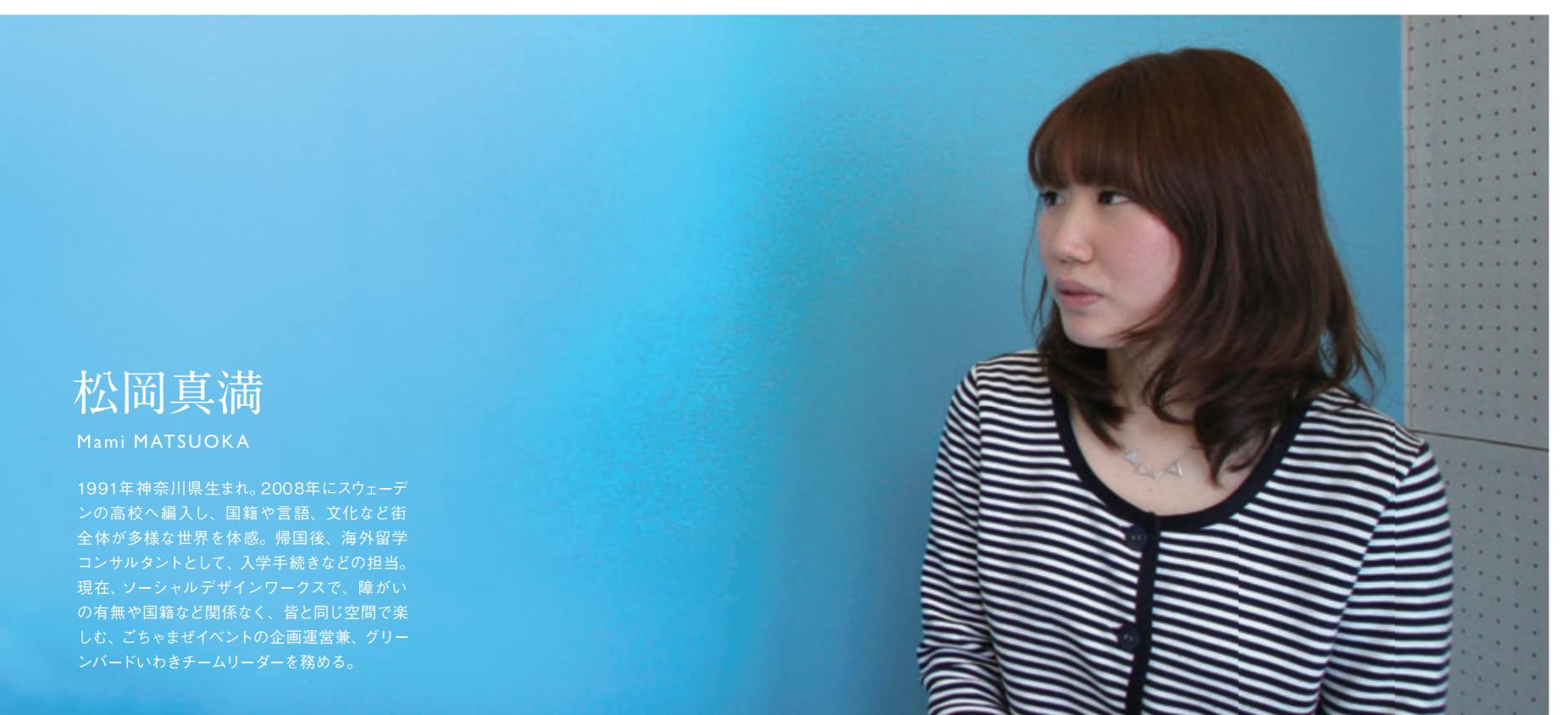
Hand Stamp Art Project 10万枚に込める、10万通りの物語

TALK
SESSION

横山万里子

ソーシャルデザインワークス
松岡真満

障がいや難病を抱えた子どもたちの「手形」を10万枚集め、それを1つの作品にして2020年東京パラリンピックで掲げようという「ハンドスタンプアートプロジェクト」。東京から始まった壮大なプロジェクトで、実はいわきからもチャレンジが始まっています。どんなプロジェクトなのか、そこにはどんな思いが込められているのか。ソーシャルデザインワークスの松岡真満が、同プロジェクト代表の横山万里子さんに話を伺いました。



松岡真満

Mami MATSUOKA

1991年神奈川県生まれ。2008年にスウェーデンの高校へ編入し、国籍や言語、文化など街全体が多様な世界を体感。帰国後、海外留学コンサルタントとして、入学手続などの担当。現在、ソーシャルデザインワークスで、障がいの有無や国籍など関係なく、皆と同じ空間で楽しむ、ごちゃまぜイベントの企画運営兼、グリーナードいわきチームリーダーを務める。

あなたも10万枚の1枚になってください。

松岡 今日はインタビューをお引き受け頂きありがとうございます。今年から私たちも「10万枚のうち1万枚を集める」という目標を掲げてプロジェクトに加えてもらっていますが、参加してくれた皆さんからの反応がすごくいいんです。最近の反響はいかがですか?

横山 ようやく1万3千枚が集まったところですが、最近は集まる速度がどんどん速くなっているような気がします。今年中に5万枚はいきたいですね。私自身、重度の障がいを持つ子どもの母なのですが、私と同じような立場のお母さんたちが共感してくれています。10万枚までまだ足りませんが、大きなムーブメントにしていけたらと思っています。



松岡 インタビューを進めて行く前に、改めてプロジェクトについて簡単に教えて頂けますか?

横山 ハンドスタンプアートプロジェクトは、18歳以下の障がいや病気を抱えた子どもたちと、それを応援する皆さまのスタンプを世界中10万枚集めて、それを2020年の東京パラリンピックで掲示をしてもらおうという活動です。重度の障がいを持つ子どもたちのお母さんたちと「子どもたちは障がいはあるけど、なにができることがあるよね」という雑談から始まりました。病院や家から出られなくとも、天使になつて空に行ってしまった子どもたちでも参加ができるものがないかなって。それで、スタンプなら誰でも参加しやすくて、1つとして同じものはないみんなの手形、足形を集めで大きな絵にできたら素敵だよね。ということからスタートしました。

松岡 横山さんの活動を知った時、コンセプトがとってもすばらしくて、私たちが展開する「ごちゃまぜ」にも通ずるものがあると直感しました。アート作品としてのビジュアルの強さもあるし、集める数が達成感に繋がりますよね。それで、私たちも参加させてもらうことになったんです。

一 誰でも参加できることが出発点

岡さんたちのように、社会にあるいろいろな壁を突破してるとコラボレーションするのはとても楽しいし、学ぶべきものがありました。

一 毎日必死に生活するなかで

松岡 ハンドスタンプは障がいを持つ子どもたちや保護者の思いや社会課題にアクセスするチャンネルにもなりますよね。横山さん自身、障がいを持つお子さんの親御さんです。プロジェクトを始めた背景には、やはり障がい児の親御さんならではのご苦労があったかと思います。

横山 障がい児のお母さんって、一緒に子どもを連れていると、よく話しかけられるんだけど、子どもたちの見た目がちょっと違ったりすると「あっ、ごめんなさい」と言われちゃうんです。障がいや病気のある子はチューブをつけていたり、器具が必要だったりするじゃないですか。普通だったら「お名前は?」とか「何が好き?」なんて会話が始まりそうだけど、コミュニケーションのハードルが上がってしまうんですね。その壁を感じると障がい児の親がバリアを張ってしまう。そういう悪循環に陥るのを防ぐためにも、楽しいことを通じて学ぶというプロセスは大切です。

松岡 確かに、私たちが関わる就労移行支援の地域格差も大きな問題です。

横山 特にお母さんは、いざれば仕事に復帰しようと思っていても、生活が大きく変わってしまうんです。毎日付き添いで保育園や施設に通う自分の時間が取れなくなってしまって。社会に復帰できなくなったり、地域の接点がなくなってしまうという、そういう問題もあります。



横山 前回いわきに来た時は雨だったので、ソーシャルスクエアのメンバーさんと一緒にスタンプを押してくれて面白いなって思いました。それぞれがやれること、得意なことを出し合って対応してくれて、みんなでできるってこういうことだなって痛感したんです。松

松岡 そうですね。障がいって、なぜかいつも当事者の負担ばかりがどんどん増してしまうけど、そうではなく、もっと地域のみんなで少しづつ負担をシェアしていくのがいいと思います。負担もシェアするんだけれど、そのきっかけが「楽しい」とか「面白い」とか

になっていけば、知る機会も増えるし、困った人に手を差し出すということが、もっと自然にできるようになりますよね。



横山 そこで思うのは、私たちって、毎日本に必死なんだけれど、やっぱり生活は楽しいんです。身の回りのお母さんたちに聞いてもそう。私の子も、重度の障がいはあったけれど、ずっと一緒にいられると思っていました。急にいなくなつて天使になってしまったけれども、その日々は、けっして劇的なわけでもなく、特別でもなく、普通の毎日でもあったし、日々楽しかった。そういうことも、ちゃんと伝えていかないといけないと思っています。

松岡 障がいを持った子どもたちを特別視することなく、当たり前の日常があつたんだ、自分たちと同じ普通の毎日があつたんだということを知れると、そこから、今までの福祉とは別の当事者意識が生まれるような気もします。ハンドスタンプって手形1つひとつに物語がありますよね。そこに触れることが大事だと思います。特別だけど特別じゃないっていうか。そういう感覚。

一普通の一日の その1コマをスタンプに

横山 10万枚の1枚1枚にストーリーがあります。その物語を繋げていきたいんです。『ペイフォワード』って映画がありますよね。1人の子が3人にいいことをして、今度はその3人が別の3人に伝えで9人になって、みたいな。あれが好きで。息子の物語を通じて誰かと繋がつて、他の子たちの物語にも出会いながら、その輪が少しづつ広がっていくような。作品が少しづつできあがって、大きくなつていって、その結果、社会が少しづつ変わっていくといいですね。

松岡 子どもたちにも伝わっていると思います。子どもたちに、障がいってなんだろうか、どんな障がいがあるんだろうとか。知らないまま大人になるんじゃなくて、子どもたちなりに学んでいく。それを続けていったさきに、ごちゃまぜなんて言葉を使わなくてもいい社会が生まれるんだと思います。そのためにも、まずは1万枚、頑張ります!

gachamaze

アイシングクッキー

5月14日の母の日の前日、ソーシャルスクエアいわき店では新たなごちゃまぜイベントが開催されました。お母さんへのプレゼントにもなる「アイシングクッキー」を作るワークショップです。参加者47名!年齢も性別も障害の有無も関係なく、ごちゃまぜにクッキーづくりを楽しみました。

ごちゃまぜイベントとは?

わたしたちが目指す、あらゆる障害のない「ごちゃまぜ」の社会。その価値観を1人でも多くの人たちに感じてもらいたい。そんな思いで定期的に開催されているのが「ごちゃまぜイベント」。農業体験、スポーツ、音楽など、様々なジャンルを取り入れた参加型イベントです。ぜひご参加下さい。

▼ 次回イベントの予定などはこちら ▼
facebookで検索!
「ソーシャルデザインワークス」

▼ 過去のイベントの詳細はこちら ▼
webで検索!
「ごちゃまぜタイムズ」

対談やインタビューのロングver.も掲載!

ごちゃまぜ Report

これまで農業体験、スポーツ、カフェ、音楽と様々なジャンルで開催されてきたソーシャルデザインワークスの「ごちゃまぜイベント」。今回みんなで楽しんだのが、初めてとなる「アイシングクッキーづくり」です。いわき市のアイシングクッキー作家、大樂美貴さんを講師に迎え、クッキーづくりの超基礎から少しづつ学びながら、それぞれ2枚のアイシングクッキーを完成させました。

アイシングクッキーとは、焼き上げたクッキーの表面を、お砂糖や卵白を着色した「アイシング」でデコレーションしたクッキーのこと。模様を描いたり、キャラクターの顔を描いたり、色々な絵柄を描くことができます。大樂さんは、アイシングクッキー講師の資格を持つ作家さんで、

静岡県からいわきに移住後、「かぎしっぽ」の名義でクッキーづくりを続けてきました。ごちゃまぜカフェイベントのときにお越し頂き、それが縁で今回、講師として参加して下さることになりました。

さて、イベントですが、まず最初に行われたのがアイシングの使い方。直線を引いてみたり、動物の形に縁取ってみたり、アイシングクッキーを作るために必要なテクニックをちょっとだけ学びます。それができたら、今度は本物のクッキーに絵を描いていきます。

クッキーがまだ作れないキッズたちはキッズルームでみんなでお遊び。リノベーションの終わったソーシャルスクエアいわきは、小さなお部屋やロフトがあるため、子どもたちがかくれんぼしたりお絵描きしたり、自由に遊べる空間が

ごちゃまぜイベントに「上手下手」はありません。皆さんが思い思いに作ることが何より大事です。そして、絵柄には個性が出て、それを褒め合うのがまた楽しいんです。大人も子どもも誰でも簡単に作れて、しかも失敗がないんです。だからこそ「ごちゃまぜ」のイベントにぴったりだと思っていたのですが、制作中の皆さんの夢中な表情や笑顔を見て、その予感が正しかったんだと確信しました。

できあがったクッキーは、本来は半日ほど乾燥せなければなりませんが、その時間がないので今回は少し乾燥させてお持ち帰り。イベントの次の日が「母の日」なので、母の日のプレゼントとして持ち帰ってもらいました。講師を引き受け下さった大樂さん、ありがとうございました!

個性派クッキー大集合!!

初めての人もいれば、作り慣れた人もいるし、手先が器用な人もいれば、そうじゃない人もいる。

いろんな人たちがくる、いろんな表情のクッキーたち。その1枚1枚が、立派な作品です。

どの1枚にも愛嬌があって、どの1枚にも個性がある。

改めて、ものづくりの根源的な面白さを感じるクッキーづくりとなりました。



ゲスト講師インタビュー 大樂 美貴さん

静岡県から移住し、アイシングクッキー作家として活動する大樂さん。アイシングクッキーの魅力やご自身のごだわりなどについてお話を伺うことができました。

—アイシングを出す、すごく難しいですね。あれは熟練の技が必要です。

大樂さん いえいえ、そんなことはないですよ。コツをつかめば、曲線や塗りつぶしもできるようになりますし、表現の幅も広がると思います。ぜひ家庭でもチャレンジしてみて下さい。

—今日は講師おつかれさまでした。感触はいかがでしたか?

大樂さん 初めて体験する方が多い中、一生懸命作って頂き、皆さん楽しんで

頂けたようで嬉しかったです。ひとりひとり個性溢れるアイシングクッキーが出来上がってよかったです。

—確かに最近アイシングクッキーをよく見るようになりました。他の作家さんと比べて、ここにこだわっている、というようなポイントはありますか?

大樂さん そうですね、アイシングクッキーは見た目も大事ですが、やっぱりクッキーなので食べて美味しいことだと思います。あちこちでワークショッ

いけないとと思っています。ですから、下地となるクッキーをおいしく焼き上げることがすべてですね。飾ってもらうのもうれしいですが、食べておいしいと言われるようなクッキーを、どんどん突き詰めていきたいと思います。

—今後の抱負をお聞かせ下さい。

大樂さん 今はまだそこまで積極的に出店しているわけではないのですが、アイシングクッキー講師の資格もありまし、販売イベントに出店するだけじゃなく、こうして皆さんと一緒にアイシングクッキーを作るようなイベントも開いていければと思っています。多くの人たちに、アイシングクッキーの魅力を伝えていけるよう、がんばっていきます!

SOCIALSQUARE から

いわき

西宮



在宅支援から就職決定！

ソーシャルスクエアいわき店の就労移行支援を経て、また1人、就職を決めた方がいます。去年の8月から在宅での支援サービスを利用してきましたHさんです。1人でも多くの方の「働きたい」という希望をサポートするのがわたしたちの役目。こうしてスクエアから社会に飛び出す方、あるいは社会に復帰していく方を送り出すと、改めてやりがいを感じます！

Hさんは、当初ひたすらデータ入力の作業をしてもらいました。同じ作業を繰り返すことで、Hさんの身体の痛みや疲れ具合を把握でき、それをHさん本人、私たち、働く企業サイドの三者が共有することで、支援の質、働き方が変わってくるからです。その後少しづつ動画編集やパワーポイントでの資料

作成などに取り組んでもらいました。在宅支援でしたので、ネットを通じての連絡ですが、支援をしていくなかで、作業能力面だけでなく、コミュニケーション能力も上昇していましたが印象的でした。

個人的にも、インターン時代からHさんの支援にあたってきたので、就職が決まったときには自分のことのようにうれしく思いました。ソーシャルスクエアいわき店では、ソーシャルデザインワークスの通常業務にも参加してもらうことで実践的な体験を積んで頂きます。単純な作業にも、コミュニケーションにも、すべての支援には意味と目的がある。そのことを新人の僕も学ぶことができました。そして、私もこうした格差を少しでもなくしていくたい、まずは地元福島の環境を少しでも変えていきたいと、そう思うようになります。

(いわき店 奥田峻史)



SOCIALSQUARE とは

SOCIALSQUARE とは、「就労移行支援」と「自立訓練（生活訓練）」のサービスを提供している福祉事業所です。障害特性への理解がある支援クルーにより、生活習慣の見直しや働くためのスキル習得など様々なニーズに対応できる環境を整えています。就労移行支援では、体調管理、コミュニケーション訓練、職業訓練、生活相談などの支援を受けながら支援クルーと一緒に就職と、その後の職場定着を目指しています。自立訓練（生活訓練）では、リラックスできるサードプレイスとして、さまざまな活動を通して、心に栄養を与えることや生活リズムを整え、活力ある人生に一歩づつ踏み出しています。

ソーシャルスクエアメンバー募集中
あなたの「やりたい」を応援します。
まずは少し覗きに来てみてください。

いわき
店西宮
店阪神西宮
駅JR西
宮駅JR内
郷駅JR内
郷駟JR内
郷駟